



耳を澄まし

メコン流域の

音風景に包まれる

ひらまつこうぞう
平松幸三

京都大学大学院
アジア・アフリカ地域研究研究科教授

メコンのほとりの村で聞こえる
生活の音は柔らかい

タイ東部メコン支流のムン川が合流する地点は、水の色が違う二つの川が二色の帯を流し、ちよつとした観光の名所だ。そのタイ側にはメコンに臨んで公園がつくられ、岸に立ち並ぶ売店やレストランも繁盛している。小型遊覧船をメコンに浮かべ、川の中にある小島を見たり、水の色の変化を愛でたりする趣向。

滔々たる大河を眺めつつジョッキを傾け、夕食をとっていると、やがて流れの向こうに灯がともる。対岸はラオス。翌日、タイ人

ラオスの寒村。50軒ほどの小さな集落からはさまざまな日常生活の音が聞こえるが、響きは柔らかい



観光客に交じって行ってみた。土産物を売る50軒ほどの小さな集落がある。お世辞にも裕福には見えない。「ビヤ・ラオ」（ラオスのビール）をはじめとする酒類、織物などを並

べている。ビヤ・ラオは結構いけて、安いので、タイ人観光客のお目当てである。この集落の音風景は静かなのか、というと、そうでもない。村人や観光客の話し声、子どもの遊

ぶ声、犬の吠える声、鶏の啼く声、料理をする音、木を彫る音などなど、人々の生活の営みがある限り、当然さまざまな音が聞こえる。それも市中で聞こえるよりも、よほど遠くから明瞭に聞こえている。ただ、柔らかいのだ。なぜだろうか。

何よりも自動車、オートバイのたぐいがないことが大きい。エンジンの音は硬い。次にデッドだ。デッドというのは、音響用語で音が響きにくい空間を指す。これが都会だと、路面やビルの壁に反射され、ライブな空間にエンジンの音が反響する。大都会の音風景はいかにも硬い。それに比べてここは、家は木造で、厚い壁はしつらえていない。道は未舗装にして凹凸に富む。音の反響が起らないのだ。

視覚的には家があり、商店が並んでいるのに、大げさに言うなら聴覚的には森の中にいるような状態となる。これが音風景を柔らかくしている。

都会の雑踏にいてもさまざまな音に包まれるが、そのとき私の耳は雑踏から閉じる。雑踏の騒音が



〈上〉 古都ルアンパバーンで行なわれる正月（仏暦）のパレード。さまざまな民族が伝統衣装を着て、音楽を演奏しながら行進する
 〈左〉 朝早く托鉢に出かける僧侶たち



見知りの村人たちの暮らしは、疎に密に相互につながっているに違はなく、聴覚経験においても同じように村人たちは、おそらく明瞭に意識することなく、そのつながりを認識しているのだろう。陶淵明

私の聴覚に壁をつくらせ、私は自分の世界をその内側に確保する。ラオスの村で、私の耳は開き、聴覚的には、自分の世界が周囲と区別なく、境界が存在しない状態になる。自分が環境に溶けてしまうような感じ。だから、村を歩くと、村人たちの生活音に柔らかに包まれるような気分がしてくるのだ。ちょうどエリック・サティの「家具の音楽」のように、「地」として無視することもできるし、「囟」として聞くこともできる音たちの世界。危険を知らせる警告となる信号音など何もない空間。互いに顔

の描く桃源郷の音風景「鶏犬相聞」も、かくやと思わせる。かつて日本の村々の音風景もよく似ていたに違いない。

古都ルアンパバーンの音風景は世界遺産登録後に変化した

ラオスの古都ルアンパバーンは、メコンとカーン川が合流する北部山間地に位置する。ベトナム戦争が終わって、現政権が成立する1975年まで、王宮があった。王都だっただけに寺院が多く、フランス人の残した瀟洒な建物を含む町並みが美しい。

総じて熱帯では、早朝の音風景がおもしろい。なかならず熱帯雨林の音風景は、極彩色と言つてよい。鳥や虫などさまざまな生物の音が遠く近くに聞こえ、自然のオーケストラが奏でる音たちに覆いつくされる。自らがその自然の中にすっぽりと包みこまれていることを実感するのだ。

ルアンパバーンでは極彩色とまではないが、やはり夜明け前は鳥と虫の音の世界になる。そして、朝は寺院から聞こえる木鐸ぼくたくの音で始まる。4時半ごろだ。起

床の時刻だろうか。明るくなるころ、袈裟を着た僧侶たちが列をなして托鉢する。その光景は、しばしばテレビで放映されるから、ご存知の読者も多いだろう。女性がひざまずいて僧侶にお供えを渡す。人々はお供えが済むまで食事をしない。僧たちの裸足の足音と衣擦れ、お供えをする音。穏やかな沈黙がその場を覆う。

同じころ、市民は朝市で食材を購入する。冷蔵庫が普及していないから、朝市が賑わうのだ。ようやく明るくなった町の一角が人々の話し声で満たされる。托鉢の列は朝市の場にも入ってくる。

この町の古い街区は、75年以降忘れられたように静かだった。言い換えると、さびれていた。今も町の商業中心は少し離れた街区にある。古い街区は、95年に世界遺産に登録され、それにあわせて町並みが整えられた。当然の結果として、海外からの観光客が激増し、ゲストハウスやホテルが建てられていった。そして、音環境が大きく変化する。

世界遺産街区ではメコン沿いに

道路が通っていて、その沿道にホテルやゲストハウスが並ぶ。もともと民家だった建物を改築したものだ。道路の反対側、川岸に野外のレストランが並ぶ。そこに座って、メコンを眺めながら食事をしたり、ゲストハウスの2階ベランダからメコンを眺めつつお茶を飲んだり、読書をしたりするのは、ルアンパバーン滞在の醍醐味である。メコンの渡し船、川を上り下りする小さな船のエンジンの音も、風物詩のように心地よい。

しかし、この道路は交通量が多い。特に、「トゥクトゥク」と呼ばれる三輪自動車のタクシーの出す騒音はいただけでない。美しいメコンのほとりの雰囲気は交通騒音のために台無しだ。トゥクトゥクの音の音量の大きいことは、われわれの実測で明らかになった。ルアンパバーンでもっとも交通量の多い道路の路肩で騒音レベルを測定したところ、最大値が100デシベルを超えたのだ！ 8人乗りの大型トゥクトゥクが通ったときだった。

夜、世界遺産街区のメインスト



〈上〉メコンの川岸に並ぶ野外のレストラン
〈右〉大きな騒音を立てて走る「トゥクトゥク」と呼ばれる三輪自動車のタクシー



* 京都大学では、ラオス国立大学と手を携えて、水処理や廃棄物処理も含む環境改善への協力を計画している。

リート、サッカリン通りは、レストランやカフェから流れ出るポツプミュージックの世界になる。通りを散策すると、一瞬いぶかる。ここはどこなのか。欧米や日本から高い航空運賃を払って、「東南アジアの真珠」にたどり着くと、そこはトゥクトゥクの騒音とポツプミュージックの音が充満する空間だった。ああ。

だが、県当局も手を拱いてはい

ない。「アジア持続可能環境都市」の指定を受けて、ルアンパバーンの環境改善に力を注ごうとしている。トゥクトゥクは、騒音のみならず排気ガスも問題だ。交通による環境汚染対策には、交通体系のコントロールを含めて、かなり総合的な調査と対策が求められるが、ラオス国内にその専門家がない。海外からの協力が必要だ(*)。



ここでラオスのために弁護しておきたいのだが、彼らは運転中めったに警笛を鳴らさない。途上国ではどこでも車の警笛音が鳴り響いている、と思われがちだが、必

メコン河の支流、カーン川で行なわれる村対抗のボートレース。近隣から大勢の人々が駆けつけ、太鼓を打ち鳴らして応援を送る

ずしもそうではない。

たしかにインドは警笛音の洪水だし、中国人もベトナム人もよく警笛を使う。しかしタイ、ラオスは違う。バンコクは車の洪水で、交通渋滞は日常茶飯事。当然、交通騒音もなかなかのものだ。が、警笛に関しては、確実に東京より少ないだろう。その理由の詮索は措くとして、ルアンパバンの音環境について言うなら、警笛音がないのは救いだ。

正月にはルアンパバンの町を祝祭の音が支配する

現代の都市部の音風景は、およそどこでも日常的には交通騒音によつて支配されている。しかし、都市の音風景のおもしろい点は、ときどき祝祭の音が圧倒的に空間を支配することだ。京都市内の中心部、山鉾町の音風景は、日常的には車の騒音が支配する、どこにもある音風景である。

しかし、7月の祇園祭の期間中の音風景は、がらつと変わる。ルアンパバンの音風景も同じだ。年間を通じて最も重要なお正月（4月上旬）のとき、音風景は大き

く変貌する。おびただしい露店が出され、近隣諸村からの人出で賑わう。大晦日の大広場では、正月のパレードに参加する女性を選ぶ、一種の美人コンテストが行なわれ、ダーツで風船を割る矢投げ屋が軒を連ねる。風船が割れるときの音が爆竹代わりなのか。それに巨大なスピーカーからボリユームいっぱい流される音楽。しかも「ドンシャリ」だ。スピーカーが「サチュって（飽和して）」、割れた低音の低音響。

明くる元旦は水かけ祭。濡れることなく道を歩くことはできない。王宮前からシェントン寺までのパレードは、さまざまな民族が独自の衣装を身につけて、音楽を演奏しながらの行進だ。

ルアンパバンの祭は、もちろん、ほかにいくつもある。9月のボートレースは、そのうちでも最も大きなものだ。カーン川で村対抗のボートレースが行なわれる。やはり露店がたくさん出て、近隣から応援が駆けつけ、岸で太鼓を鳴らして応援する。なにごとにつけ控えめなラオス

人にとつては、祭は羽目はずすときなのだろう。けつこう大きな音を出して、喜ぶのだ。

ラオス南部の農村で調査したとき、ボートレースの季節に行きあつたことがある。今日はあの村、明日はこちら、という具合に毎日のように近隣の村でボートレースが行なわれ、村人はケーンという大きな笙やドラムを携えて小船で出かけるのだ。自分たちの村が出走したときは、ケーンを吹き、ドラムを叩き、やんやの声援を送る。

ボートレースの最中もさることながら、帰りの船の中はいまだ興奮冷めやらず、ケーンとドラムに手拍子で、歌え踊れの大騒ぎ。ひつくり返らないかと、本気で心配した。いつもは静かなメコンの岸辺。祝祭の音風景の陽気なこと。



ひらまつ こうぞう ●大阪生まれ。京都大学大学院工学研究科修了。騒音の影響と予測に関する研究から、音環境のフィールドワークに移り、京都、沖縄、タイ、ラオスで騒音の疫学研究ならびにサウンドスケープ研究を実施